

6、老・病・死を見て世の非常を悟る(お釈迦さまの生涯③ 四門出遊)

ある日、シッダールタ王子は従者を連れてお忍びで城の外へ出掛けた。城の東西南北にはそれぞれ門があり、門を出たところでシッダールタは老人と出会う。衰えた姿の老人を見たシッダールタは、従者から「人は誰もが衰えて老人になる」ことを告げられる。ここで知ったのことは「自分が老いていく」という我が身の事実。そのまま出掛けるような気分ではいらなくなったシッダールタは踵を返して門内に戻る。次に南の門から外へと、するとそこには辛そうに臥せる病人がいた。次に、西の門から外へ出ることを試みる。そこで出会ったのは死者を送る葬列。沈痛な面持ちで歩く人々と、もはや起き上がることのない死者の姿がそこにあった。人間は葬られて骨になることを免れない。生まれた者は必ず死ぬのだという事実を突きつけられたシッダールタは、紛れもないこの自分が死ぬ存在であることに恐怖し、またしても城へと戻る。

7、自分の人生には「老」「病」「死」が待ち構えている

この事実を自覚したシッダールタは、人生に明るい展望を抱くことができなくなってしまった。しかし、最後に北の門から外に出たとき、閉塞した未来に活路を見出す。そこでシッダールタが出会ったのは、穏やかな佇まいの出家者。人生の先に待つものが老病死であるにも関わらず、安らかに生きる出家者の姿を見て、シッダールタは驚く。なぜ出家者は老病死の苦悩に満ちた人生を安らかに生きることができるのか。自分もその道を歩んでみたい。自分の救いはそこにしかない。こうしてシッダールタは出家への願望を抱くようになった。

法語2 忿(ふん)を絶ち瞋(しん)を棄てて、人の違うことを怒らざれ。人皆心有り。心おのおの執れること有り。彼れ是(ぜ)なれば則ち我れ非なり、我れ是なれば則ち彼れ非なり。我必ず聖に非ず。彼必ず愚かに非ず。共に是れ凡夫ならくのみ。

(十七条憲法 聖徳太子)

聖徳太子は仏教の願いを持って国を治めようとした。人はみな自らの思いにとらわれている。自分が正しく、相手が間違っているのではなく、共に凡夫であると。



8、本願力にあいぬれば 空しく過ぐる人ぞなき

家へ帰れば安心して凡夫になれる。…(中略)… 煩悩まる出しの、ゼロどろの凡夫のままで、お互いに生きあう。しかし、そういう中でも、なおかつ尊敬しあえるということは奇跡のようなこと。実はその煩悩まる出しのどろどろの、そういう私たちがお念仏の力によって浄化される。それは私たちの力ではない。本願力なのだ。
(『いのちをたずねて—私は何をよりどこに生活しているか—』竹中智秀)

私たちは、夫婦である前に共に凡夫の身を生きていた。それぞれが心を持ち、さまざまな感情を抱き、何かに執着し生きているものを凡夫と呼びかけられている。それが人間であり、私も何かに執着した一人の人間であって、夫もまたそのような人間であるという事実を思い知らされた。しかし、そういった煩悩まる出しのどろどろとしたもの同士でも共に生きられる世界があると。